

やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

1月9日午後、近鉄南大阪線の尺土駅から南へ歩く。途中、葛城市疋田の調田坐一事尼古神社に参拝して、さらに南下すると広大な疋田池がある。池面を利用した大規模な太陽光発電の様子に驚かされる。車の行き交う大和高田バイパスを潜ると右手に葛城市弁之庄の集落。田の中に諸鍬神社の森が見えてきた。西には葛城山がそびえ、南の少し離れた所に石鳥居がポツンと離れて建っており、「八幡宮」の額が掲げられている。

境内に入ると、拝殿前の広場には笹竹を四隅に立て、注連縄が張つてある。ゴクマキ用の餅もたくさん準備してある。田植行事「オンド」の準備はほぼ終わっている。オ

の上に鍬の端でチヨンと穴をあけ、そこに豆を蒼に豆を蒼いていく作業が見えてくるようだ。そばには丸い藁の座布団のような物が二つ置いてある。聞けば牛役がそこにうずくまるので作ったという。儀の両端を開じる桟儀が座布団として残っているわけだ。

午後2時から、神職と氏子総代など関係者が集まり、拝殿で祭典が始まつた。2時半頃から斎田で

(畦)が再現されているのは珍しい。40年前までは、三本鍬で田の土を盛ってアゼを作り、鍬を使ってきれいに畦塗りをしていたという。そのア

諸鍬神社のオノダ

2023年1月9日、筆者撮影



葛城山麓のオンド

た。昨年は新型コロナの感染防止のため関係者がだけで行われたというが、今年は祝日と重なったこともあり、家族連れで大勢が集まっている。牛使いが牛役を使ってまず小型のカラスギ(唐鋤)で田起こしをしてから、マンガ(馬鍬)で土を均してまわる。同時に鍬を持った田男がアゼ塗りをしていく。終わると牛は人々の間に入つて暴れ出して、境内は騒然となる。このあと松葉を地面に置いていく田植えが行われ、最後にいよいよゴクマキとなる。祝日ので90枚、米3俵分用意したという。しばらく老いも若きも餅を求めて賑わいが続いて3時ごろに行事は終了した。世話役の人たちは早速後片付けを始

めている。

諸鍬神社は、神社のある弁之庄を始め、周囲の北道穂、西室、中戸、藤井の5地区の神社であるが、それぞれの地区には別途神社があり、この日の世話役は弁之庄の八幡宮とも呼ばれていた。昨年は心神天皇、神功皇后、玉依姫を祭神とし、「八幡宮」とも呼ばれていたが、もと尾張国の神社で勤めているという。同社は、慶長5(1600)年までたは6年に、新庄(布施)藩主桑山一晴がこの地に藩主桑山一晴がこの地に入部した時に、本貫地尾張の諸鍬神社を当地に遷したもののだった。その後、80年余り経た天和2(1682)年に、桑山氏は改易され所領を失うが、同社への信仰は失われず、曲折を経て今日に及んでいる。

(奈良民俗文化研究所代表)

表